

## 【教科としての道徳】 第17回

「道徳」が「特別の教科」になり、現在の移行期をへて、小学校では二〇一八年度より教科書を使用し、本格的にスタートします。

日生連は、「三層四領域論」として、系統課程を三層のうちの一つとして重視しています。これは少し狭い意味での〈教科〉に対応します。日生連は、この部分に関して、民間教育団体の中で、もつとも〈系統主義〉的な団体です。教科とは、天野によれば、「教育目標を達成するために児童・生徒に教授すべき教育内容のまとまりであり、人類と民族の文化遺産を学習者の発達にに応じて、もつとも効果的に習得させようように系統的に組織したもの」です。「道徳」を〈教科〉とするなら、これらの条件を満たさなければなりません。教材研究の前提として、やはり対応する文化遺産、とりわけ〈学問〉が必要で、学習指導要領をみると、内容として例えば、「よいことと悪いこととの区別」があげられてい



ますが、善悪の区別はそんなに簡単なことではありません。教科であるなら、それを判断する〈体系〉が必要となります。そう考えると、教科として道徳を構想するならば、社会倫理学や心理学などの研究が発せになり、使えるものをさがしてみると、少し古いですが、デューイ（とタフツ共著）『社会倫理学』などが、生活教育の中の「教科としての道徳」をつくる上で必読のものに感じられます。

形成される規則体系について、「どれかを教条的に主張したり、……なげすてたりはせず、現在何が正しく、何が善であるかをしめす知識や可能的指標の倉庫として……あつかう」ことを大学生と取り組んだ道徳教育実践の成果報告書でもあります。（研究部・加藤聡一）

### 参考文献

- ①天野正輝『教育課程の理論と実践』樹村房、一九九三年。
- ②柴久野収訳『デュウイ・タフツ 社会倫理学 世界の大思想27』河出書房新社、一九六六年（原書再版一九三三年、一七〇ページ）。